

チャガタイ語詩の押韻に関する一考察

菅原 睦

はじめに

中央アジアのチュルク語文学は、イスラーム化以降、ペルシア語文学の強い影響を受けることとなった¹⁾。特に韻文作品では、題材と形式の両面においてペルシア語文学の作品を模範とする傾向が強かった。その際に必要となったのは、ペルシア語詩の韻律論（‘arūd）を、異なる音韻体系をもつ言語であるチュルク語に対して適用することであった。その適用の仕方は、最初にペルシア語詩の形式でチュルク語作品が書かれた11世紀以降、チュルク語—ペルシア語関係の変化やチュルク語自体の通時的変化の影響を受けつつ変わっていったと考えられるが、そうした移り変わりの詳細について論じた研究は知る限り存在しない。本稿では、いわゆる前古典期チャガタイ語（15世紀前半）と古典期チャガタイ語（15世紀後半—16世紀）の韻文作品をそれぞれいくつか取り上げ、その間に見られる押韻パターンの違いを指摘するとともに、そのような違いを生み出した要因についても考察してみたい²⁾。

議論に先立ち古典ペルシア語とチャガタイ語の母音体系を以下に示しておく。

古典ペルシア語の母音体系（二重母音を除く）

短母音 ä i ü

長母音 ā ē ī ō ū

チャガタイ語の母音体系（一般的な推定による）

前舌母音 ä e i ö ü

後舌母音 a i o u

-
- 1) チュルク語文学の発展においてペルシア語文学の果たした役割については、筆者による概観（菅原 2002；2009）を参照されたい。
 - 2) チャガタイ語韻文の押韻に関しては、同時代のものを別とすれば *Sanglāx* [Sang. 25 v 17–26 r 3], Рустамов (1963: 137–139; 291–292), Levend (1965: 215–216; 1967: 8–9), Стеблева (1966; 1993: 53–72) などにそれぞれ興味深い指摘があるが、いずれも押韻法の全体像を実例に基づいて記述したものではない。なお本稿では韻文作品の押韻のみを取り上げ、いわゆる押韻散文は考察の対象としない。

I ペルシア語 $x^w\bar{a}$, $x^w\bar{a}$ の扱い

古典期チャガタイ語を代表する文人であるナヴァーイー Mir Ališer Nawā'i (1501 年没) の作品において、古典ペルシア語音 $x^w\bar{a}$ は現代ペルシア語のような xo としてではなく、本来の母音 \bar{a} を保った形で押韻することが知られている³⁾。

bē-ḥād - bē-x^wād [FŠ XLIV-45]⁴⁾

dār-x^wār bolmağay - sāmāndār bolmağay [LṬ 2565]

qādāh-kāš - x^wāš [FŠ XV-5]

x^wāš - ānbār-kāš [LṬ 702]

x^wāš - nārānj-wāš - ātāš - ... [ĠŞ ガザル 273]

同じ現象はバーブル Zāhir al-dīn Muḥammad Bābur (1530 年没) の韻文作品においても観察される。

qaš kerāk bolsa - quyaš kerāk bolsa - x^wāš kerāk bolsa - ... [BD ガザル 12]

x^wāš edi - dil-kāš edi - čirmaš edi - ... [BD ガザル 108]

このような押韻上の扱いに反して、以下にあげる根拠から明らかなように、当時の実際の発音は現代ペルシア語や現代チュルク諸語の形式と同様、円唇母音 o (あるいは u) を含むものであった⁵⁾。

・ 15 世紀のウイグル文字文献において、当該の母音は円唇母音を表わす文字 W で表記されている。

QWT [TA 95 r 14] 「自分」 < Pers. $x^w\bar{a}d$ (cf. ModPers. xod)

QWŠ [MN 164 v 3]; QWS [TA 144 v 3]; XWS [TA 81 v 9], [QBH 31.5] 「よい」

< Pers. $x^w\bar{a}š$ (cf. ModPers. $xoš$; Uzb., Uyg. $xuš$; Tkm. $xoš$; Kaz. $qoš$)

P'R-QWRD'R-LYX [TA 96 v 10] < Pers. $bār-x^w\bar{a}rdār$ 「繁栄した」 (cf. ModPers. $bar-xordār$) + $-liq$

・ $x^w\bar{a}$ を含む音節に接尾辞 $-liq$ や $-liq$ が後続する場合、通常は円唇母音をもつ異形態 $-luq$,

3) この事実は Bodrogligeti (1963: 271 fn. 75), Levend (1967: 8), MQ: 261 (註 8 他) などで指摘されている。なおまれな例外として *bē-x^wādīn - qayğudīn - uyqudīn* という押韻の例がある [BW ガザル 462]。

4) 本稿の性質上、以下の引用例ではすべて転写方法を筆者の判断で統一したことをお断りしておきたい。

5) ペルシア語で x^w に後続する $a > o$ (および $\bar{a} > \bar{o}$) の変化は、既に 14 世紀のラテン文字資料 *Codex Cumanicus* に認められる。Bodrogligeti 1971: 44, 46 を参照。同じく x^w が唇音化要素を失って x に変化したことについては Pisowicz 1985: 121-123 を参照。

-*luğ*が選択されている⁶⁾。

bē-x^wādluğ [ĠŞガザル 160-7]; *bē-x^wādluğ* [BD ガザル 32-3]

nā-x^wāšluğ [ĠŞガザル 589-3]; *x^wāšluğ* [LT 2060]; *x^wāšluğ* [BD 126-40], [BN: 127.16]

・バーブルはその『韻律論の書』の中で、このような語の綴り字 *xw*-に見られる文字 *w* が「U 母音記号の表示」(*ḍamma 'alāmati*) であり、子音としては「発音されない」(*mutal-affaḡ bolmas*) と述べている [‘AR 24 a 4-7]。

従って、古典期チャガタイ語の文人であるナヴァーイーやバーブルは、これらの語に関するかぎり実際の発音よりもペルシア語韻律論の「規範」に従って押韻させていたと判断される。

一方これに対して、前古典時代チャガタイ語の韻文作品においては、ペルシア語 *x^wā* はチュルク語の母音 *o* を含む語と押韻している。

x^wāš - oš [MA 091]

x^wāšlar - qošlar [DN 127⁷⁾]

x^wāš tut - qoš tut [Lufti, *Gul u Nawrōz* (Фазылов 1982: 163)⁸⁾]

ペルシア語 *x^wā* がチュルク語の母音 *o* (あるいは *u*) やさらにはペルシア語の母音 *ō* と押韻する現象は、14 世紀のチュルク語作品である『弟子への助け』(1313 年) [MM] やクトゥブ『フスラウとシーリーン』(1341/42 年) [Quṭb], サイフ・サライー『チュルク語による薔薇園』(1391 年) [Sayf] にも見られる⁹⁾。

nā-x^wāšī - qušī [MM 60]

oš - x^wāš [Quṭb: 28]; [Sayf: 117]

x^wāš - nōš [Quṭb: 37]

x^wāš - hōš [Sayf: 63]

この状況は、前古典期チャガタイ語に見られる、*x^w* の後での母音 *ā* の円唇化を反映した押韻パターンが、ペルシア語韻律論がチュルク語に導入された初期の段階に属するものであることを示している¹⁰⁾。言い換えれば、古典チャガタイ語期においては、それまでのチュルク

6) *nā-x^wāšliğī - s ār-kāšliğī* [ĤA XLII-68] などは押韻のための例外的な形と判断される。

7) エディション (p. 40) は *kušlar* とするが誤りであろう。なお今回使用した [DN] のエディションは Ersin Teres 氏 (ユルドゥズ工科大学) の御好意により利用することができた。同氏に深く感謝したい。

8) ただし同じ作品には *x^wāš - dīl-kāš* (Русамов 1963: 277-278) のように、古典期チャガタイ語と同じく母音 *ā* と押韻する例も見られる。

9) ここで 14 世紀以前のチュルク語における母音の長短の問題は考慮しない。

10) もちろんこのことは、前古典期チャガタイ語が 14 世紀チュルク語文学の伝統に直接つながるものであることを必ずしも意味しない。

語詩において行われていた押韻法に代えて、ペルシア語詩の規範により忠実な押韻法が新たに導入されたと考えられるのである。

なお、古典ペルシア語 $x^w\bar{a}$ (現代ペルシア語 $x\bar{a}$) については状況が異なり、前古典期チャガタイ語作品においても円唇母音とではなく \bar{a} と押韻している。

$r\bar{a}st - x^w\bar{a}st$ [MA 246]

$m\bar{a}hm\bar{a}n - x^w\bar{a}n$ [MA 427]

$m\bar{a}h-t\bar{a}b\bar{i} an\bar{i}n - x^w\bar{a}b\bar{i} an\bar{i}n - \dots$ [LD ガザル 134]

$\bar{i}zh\bar{a}r \bar{a}yl\bar{a}d\bar{i} - x^w\bar{a}r \bar{a}yl\bar{a}d\bar{i} - \dots$ [LD ガザル 323]

$m\bar{a}h sen sen - d\bar{i}l-x^w\bar{a}h sen sen - \dots$ [GD ガザル 165]

$x^w\bar{a}$ はまた古典時代の作品においても後続する接尾辞に円唇母音を要求しない。

$b\bar{e}-x^w\bar{a}bl\bar{i}g$ [LT 795]

$d\bar{i}l-x^w\bar{a}hli\bar{g}lar$ [LT 678]

$x^w\bar{a}rli\bar{g}$ [GŞガザル 271-3], [MQ: 258, 286]

$x^w\bar{a}rli\bar{q}$ [BN: 151.13]

従って $x^w\bar{a}$ は $x^w\bar{a}$ と異なり円唇母音化を起こしておらず、押韻の際にも円唇母音としては扱われなかったことが理解される¹¹⁾。

II チュルク語 $a : \bar{a}$ とペルシア語 $\bar{a} : \bar{a}$

ナヴァーイーはその『二つの言語の裁定』の中で、チュルク語詩の押韻について次のように記している。

ara (‘r’) という語は $s\bar{a}r\bar{a}$ (‘sr’) や $d\bar{a}r\bar{a}$ (‘dr’) と押韻させることができるし、 $s\bar{a}r\bar{a}$ (‘srh’) や $d\bar{a}r\bar{a}$ (‘drh’) とともに押韻させることができる、別の例: $yada$ (‘yd’) という語は $\bar{s}ad\bar{a}$ (‘sd’) とともに押韻させることができるし、 $b\bar{a}d\bar{a}$ (‘b’dh’) とともに押韻させることができる。[ML: 175]

この一節の意味するところは、チュルク語の母音 a がペルシア語の母音 \bar{a} , \bar{a} のいずれとも押韻可能であったということである。実際に、古典期チャガタイ語の韻文作品中には母音 a

11) ただし次のような点を考慮する必要がある。

- ・ [MA 434] では、エディション (p. 97) によれば $x\bar{o}n$ (< Pers. $x^w\bar{a}n$ 「盆」) がチュルク語 on 「10」と押韻するという。
- ・ ウイグル文字文献では $x^w\bar{a}$ に対しても表記 QW , XW があてられている: QWC ’ [TA 128 v 15] 「主人」 (< Pers. $x^w\bar{a}j\bar{a}$); $T’RQWST$ [TA 70 r 15] 「願い」 (< Pers. $d\bar{a}r-x^w\bar{a}st$); $XWN-SL’R$ [QBH 9.12] 「膳部」 (< Pers. $x^w\bar{a}n-s\bar{a}l\bar{a}r$)。
- ・ [SD カスィーダ I-2] には円唇母音を含む接尾辞 $-luq$ が付された $x^w\bar{a}rli\bar{q}n\bar{i}$ という例が見られる。

が *ā* や *ā* と押韻する例が見出される（ただし後者の例は前者に比べてはるかに少ない）。

• *a - ā* の押韻例

fāš - baš [FŠ XIX-31]

qāqā dek - ya dek [FŠ XI-46]

hāyāt - qanat [LṬ 371]

yīraq - firāq [LṬ 1941]

qara bolup tur - bālā bolup tur - dāwā bolup tur - ... [ĠṢガザル 165]

• *a - ā* の押韻例

kišwāridīn - saridīn [FŠ XXI-4]

yaman dur - fān dur [FŠ LIII-58]

anī - māxzānī [LṬ 248]

これに対して前舌母音 *ä* は, *ā* とのみ押韻し *ā* とは押韻しないようである¹²⁾。

• *ä - ā* の押韻例

bās - ötmäs [FŠ XLI-103]

tikän - čämän [LṬ 681]

ölmäk maṇa - bē-šāk maṇa ... [ĠṢガザル 12]

tän ara - tikän ara - sāmän ara - ... [ĠṢガザル 23]

興味深いことに, 前古典期チャガタイ語作品では, 古典期のものには見られない *ä - ā* の押韻例が散見される。

šābā - jāzā - ... - bilā [SD カスィーダ III]

bālā qīla dur - mübtālā qīla dur - ... - külä qīla dur [LD ガザル 44]

čālāk - čāk - ... - tirilmäk [LD ガザル 127]

bolgan bālā - kelgän bālā - yāzdän bālā - jān bālā - ... [LD ガザル 10]

ṭülü' etkän quyaš - särgärdän quyaš - hāyrän quyaš - qan quyaš - ... [GD ガザル 92]

ä - ā の押韻はまた前述した 14 世紀のチュルク語作品や, さらに古い『クタドゥグ・ピリグ』(1069/1070 年) [QB] でも用いられている。

üzä - säzä [MM 11]

ikkidä - ādā [MM 138]

āsän - yerdän [Quṭb: 35]

zār - ketär [Quṭb: 167]

ičinä - gädä [Sayf: 39]

12) まれな例外については本稿Ⅲで取り上げる。

körünsä - tāmāšā [Sayf: 115]

xātā - südä [QB 2583]

tümän - jāhān [QB 3009]

従って、上述した古典ペルシア語 $x^mā$ の押韻の場合とまさに同じ状況がここでも観察される。即ち、前古典期チャガタイ語詩が 11 世紀にまで遡る「古い」タイプの押韻法の原則によっているのに対し、古典期チャガタイ語ではこれとは異なる「新しい」押韻の規則が用いられているのである。

それでは、古典期チャガタイ語で $ä - ā$ の押韻が避けられるようになった理由はどのように推定できるだろうか。古典ペルシア語の母音 $ä : ā$ の対立は、時代の経過とともに前舌：後舌という音色の対立へと移行していったとされる¹³⁾。このことは、チュルク語の母音 $ä : a$ の関係とペルシア語の母音 $ä : ā$ の関係との間に一種の並行性を生み出したであろう。即ち、チュルク語の $ä$ とペルシア語の $ä$ 、チュルク語の a とペルシア語の $ā$ とがそれぞれ押韻上同類の母音と見なされるようになったのである¹⁴⁾。この推定が正しければ、ペルシア語の母音 $ä$ は、古典期チャガタイ語においてチュルク語の a よりも $ä$ とより多く押韻するはずである。これまでの調査では、 $a - ā$ の押韻と $ä - ā$ の押韻とは用例数の上で明確な違いを示さない。しかしナヴァーイーの作品においては次のような興味深い傾向が認められる。即ち、 $a - ā$ の押韻が、通常は複数の音節からなる「押韻部分」¹⁵⁾の中で用いられているのに対し、 $ä - ā$ は 1 音節のみで押韻を作ることがある。

• $a - ā$ を含む押韻

yamanni - āhrimānni [FŠ XXII-91]

yaman dur - fān dur [FŠ LIII-58]

‘ālīmlarğa tā’zim - päygāmbārğa tā’zim [FŠ LIII-21]

yanasi - dēwānāsī [LṬ 1312]

• $ä - ā$ の押韻

emgäk - bē-šāk [FŠ XXV-75]

kināsīdīn - ignāsīdīn [FŠ XLV-51]

bū-l-hāwās - emās [LṬ 1293]

birāw - rāh-rāw [LṬ 2503]

言い換えれば、 $ä - ā$ がそれ自体で押韻を構成することができるのに対し、 $a - ā$ は単独で押韻を構成するには不十分であったため、前後の音節によって「補強」される必要があったの

13) Pisowicz (1985: 89-95) 参照。なお同書はこの母音変化の要因としてチュルク語の影響を挙げている。

14) ペルシア語詩では $ä$ と $ā$ とは互いに押韻せず、また表記も異なる。

15) あるいは押韻と反復句 (radif) から成る部分。

である。一方、同じ古典期チャガタイ語に属するバーブルの作品では、 $a - \bar{a}$ も $\bar{a} - \bar{a}$ と同様に1音節による押韻を構成しており、この点で上述のナヴァーイーの作品とは異なる。

・ $a - \bar{a}$ の押韻

bolmas - bās [BD 4-6]

hāq - andaq [BD 4-65]

firsāt - bat [BD 4-177]

・ $\bar{a} - \bar{a}$ の押韻

emās - bās [BD 4-64]

bē-šāk - kerāk [BD 4-74]

āgār - desālār [BD 4-98]

今回確認できた範囲¹⁶⁾では、*bolmas - bās*のように $a - \bar{a}$ が押韻するものが6例に対し、*emās - bās*のように $\bar{a} - \bar{a}$ が押韻するものが7例¹⁷⁾見られるため、両者は数の上でも拮抗しているといえる。しかしここで、前者のうち3例が上記*hāq - andaq*のように $aq - \bar{a}q$ の押韻である点が注目される¹⁸⁾。これらの例においては、子音 q の影響により \bar{a} の前舌母音化が妨げられるため¹⁹⁾、チュルク語の後舌母音 a との押韻がより容易であったと推定される。従ってそのような要因が関与しない状況では、チュルク語 \bar{a} - ペルシア語 \bar{a} という組み合わせがやはり優位であり、 $\bar{a} - \bar{a}$ は $a - \bar{a}$ に比べてより「好ましい」押韻のための材料であったことが伺える。これに対して前古典期チャガタイ語作品においては、 $\bar{a} - \bar{a}$ の押韻が優位であったことを示す証拠は見られない²⁰⁾。結局、古典期チャガタイ語では、ペルシア語の母音 \bar{a} (短・前舌) : \bar{a} (長・後舌) の関係がチュルク語の平唇広母音にそのままあてはめられた結果、チュルク語 \bar{a} はペルシア語 \bar{a} と、 a は \bar{a} とそれぞれ同類の母音として、互いに押韻する関係が確立したと考えられる。同時に、この関係に合わない $\bar{a} - \bar{a}$; $a - \bar{a}$ という組み合わせが不適切あるいは不完全な押韻とされることで、従来の押韻パターンが整理されていったのである²¹⁾。

16) 内訳は、243対句からなるマスマナヴィー『父のための書』[BD 1-5]、ガザル119篇[BD 6-124] および短いマスマナヴィー8篇[BD 125-132]。実際にはここで問題とする押韻の例はマスマナヴィーにおいてのみ見られる。

17) 他に母音が確定できないものが1例あった：*sūnnātār*あるいは*sūnnātār - āgār* [BD 4.23]。

18) 他の2例は*andaq - mūtāq* [BD 4-153] と*hāq - mundaq* [BD 4-186]。

19) cf. Pisowicz (1985: 92-93)。

20) ただし前古典期作品では母音 \bar{a} を含む押韻の例自体がかなり限られている。なお $\bar{a} - a - \bar{a}$ が押韻する次のような例も注目される：*θāmār - tār - qamar - ... - kečār - ...* [GD ガザル 67]。

21) 同じ理由により、母音 $\bar{a} - a$ の組み合わせも古典期チャガタイ語では単独での押韻が避けられるようになったと考えられる。これに対して $i - \bar{i}$, $\bar{u} - u$, $\bar{o} - o$ のような前舌母音と後舌母音の対はそれぞれ互いに押韻可能であることに注意されたい。

III 押韻と母音体系

前章では、古典期チャガタイ語においてチュルク語の母音 *ä*, *a* を含む押韻パターンがペルシア語の押韻パターンに合わせて整理されたことを示した。本章ではこの同じ現象をチュルク語側の母音の変化という観点から検討してみたい。

知られているように、現代ウズベク語（標準語）は、母音調和を失った結果、チュルク語としては特異な母音体系をもつようになっている。平唇広母音に関して言えば、元の *ä* は *a* の一部とともに <a>²²⁾ となり、*a* の残りの部分は <â>²³⁾ となっている。さらにペルシア語起源の借用語では、元の *ā*, *ā* がそれぞれ <a>, <â> として反映される。前章で取り上げた押韻する語例のいくつかを、対応するウズベク語形で示すと以下のようなになる。

- <fâš> - <bâš> (*fâš* - *baš* [FŠ XIX-31])
 <hayât> - <qanât> (*hâyât* - *qanat* [LṬ 371])
 <qâra> - <balâ> (*qara bolup tur* - *bālā bolup tur* - ... [GŞ ガザル 165])
 <bas> - <otmas> (*bās* - *ötmäs* [FŠ XLI-103])
 <tikan> - <čaman> (*tikān* - *čāmān* [LṬ 681])
 <agar> - <desalar> (*āgār* - *desälār* [BD 4-98])
 <kišwari> - <sari> (*kišwāridin* - *saridin* [FŠ XXI-4])
 <yana> - <dewāna> (*yanasi* - *dēwānāsi* [LṬ 1312])
 <yāmān> - <fan> (*yaman dur* - *fān dur* [FŠ LIII-58])

これらの例からは、古典期チャガタイ語の押韻パターンとウズベク語の母音との間に一定の並行性があることが窺える。言い換えれば、古典期チャガタイ語の押韻には、ウズベク語の母音をあてた場合²⁴⁾に効果的に押韻するものが多く見られるのである。それでは、この事実を根拠に古典期チャガタイ語の押韻がウズベク語のものに近い母音体系に基づいていたと推定することは、はたして可能だろうか。

言うまでもなく、古典期チャガタイ語がこんにちのウズベク語のように母音調和を失っていたと主張できる言語内的な証拠は、これまでのところ見つかっていない。とはいえ、以下に示す『パーブル・ナーマ』の有名な一節からは、当時既に文章語の規範とは異なる地域的な変種が存在し、また知られてもいたことが理解される。

「(アンディジャンの) 住民の言葉使いは文語と一致している (*qalam bilä rāst tur*)。

22) 環境により [a], [æ], [ɑ] などとして実現する。正書法では a で表記される。

23) 代表的な異音は後舌円唇広母音 [ɒ] である。正書法では o で表記される。

24) ちなみに、ウズベキスタンで出版されたチャガタイ語テキストはこの方式でウズベク語の正書法により転写されている。

なぜならばミール・アリー・シール・ナヴァーイーの作品は、彼がヘラートで育ったにもかかわらずこの言葉によっているからである。」[BN: 5.3-5]

ここで問題になっている「文語との（不）一致」の中に母音体系に関わるものが含まれていたと仮定すれば、この時代の一部のチュルク語方言が、例えば現在のウズベク語のような母音体系をもっていた可能性も排除できないことになる。実は、このような推定をすることにより押韻パターンに見られるある例外が説明可能となる。上述のように、古典期チャガタイ語では $\ddot{a} - \bar{a}$ の押韻は避けられていたが、ナヴァーイーの詩集『中年時代の驚き』中のあるガザル [BW 520] に、これに違反する *bilāw* 「砥石」²⁵⁾ - *ġuzġāw* 「ロバの首飾り」 - *qiraw* 「霜」 - *küyāw* 「婿」という押韻の例が見られる。ここで *ġuzġāw* と読まれている²⁶⁾語はペルシア語 *ghazhghāw* (Steingass 887 r) と同一の語と考えられるため、ここでは *äw* と *āw* (と *aw*) とが押韻していることになる。一方、チャガタイ語の母音 \ddot{a} に対応するウズベク語は通常は上述の通り $\langle a \rangle$ であるが、子音 *w* の前では $\langle \grave{a} \rangle$ が対応する：チャガタイ語 *birāw* 「一人」に対しウズベク語 $\langle bir\grave{a}w \rangle$ ；チャガタイ語 *küyāw* 「婿」に対しウズベク語 $\langle kuy\grave{a}w \rangle$ ；チャガタイ語 *išlā-* 「働く」に対しウズベク語 $\langle i\grave{s}l\grave{a}- \rangle$ 、派生名詞 $\langle i\grave{s}l\grave{a}w \rangle$ など。

このことを考えに入れるならば、上のガザル中で \ddot{a} と \bar{a} との押韻という稀な現象が子音 *w* の前で見られるのは単なる偶然ではなく、この時期のチュルク語口語において *äw* の母音の後舌化し²⁷⁾ *aw* との対立を失うという傾向があったことの反映と見るができるのである。しかしこの傾向はいまだ極めて限られたものに過ぎなかったと判断しなければならない。なぜなら、*äw/aw* がペルシア語 *āw* と押韻する例がより多く見出されるからである。

birāw - rāh-rāw [LT 2503]

rāh-rāw - ikāw [LT 2631]

pärtāw - ... - tāk u dāw - ... - birāw [GŞガザル 531]

pēš-rāw dur - qiraw dur [FŠ XVIII-67]

これらの例では、上で見たガザルの場合とは異なり、末尾に *äw/aw* をもつ *birāw*, *ikāw* 「2人」(cf. Uz. $\langle i\grave{k}k\grave{a}w \rangle$), *qiraw* がいずれもペルシア語の *āw* ではなく *äw* で終わる語と押韻しているため、*äw* の母音の後舌化を考えることはできない。何よりも、仮に当時の口語において起こりつつある母音変化がそのまま押韻に反映されたとしたら、それは本稿 I で見た、実際の発音よりもペルシア文学の規範が優先されるという事実と喰い違ふことになってしまう。結局、古典期チャガタイ語の時代において、こんにちのウズベク語につながるような母音変化の兆しがあったことは考えられるものの、チャガタイ語詩の押韻法がペルシア

25) エディション (p. 378) では *bi-lāw* と転写されているが、誤りである。*bilāw* については Sang. 149 v 9 および ED 341 (*bile: ġü:*) を参照。

26) エディションでの転写は *ġuzġāw*。

27) おそらく円唇化を伴ったであろう。

語韻律論の規範に従うものであった以上、そのような変化が直接押韻に反映される可能性は極めて低いものであったと言わざるを得ないのである。

結びに代えて

本稿では、チャガタイ語のいわゆる前古典期と古典期の韻文作品に見られる押韻の特徴を比較し、古典期においては従来の押韻パターンが整理され、ペルシア語詩の規範により忠実な押韻法が採用されたことを示した。このことは、ナヴァーイーがチュルク語詩の現状を、特に形式面での不備に関して批判していた〔菅原 1998：123-125〕事実とも矛盾しない。

チャガタイ語の押韻に関しては、なお問題とすべき点が数多く残されている。今後さらに対象とする文献を増やし分析を重ねていく必要がある。

参考文献

- 'AR: Захир ад-дин Мухаммад Бабур, *Трактат об 'арузе*. Факсимиле рукописи, издание текста, вступительная статья и указатели И. В. Стеблевой. Москва 1972.
- BD: B. Yücel, *Bâbü'r Divânı* (Gramer - Metin - Sözlük - Tıpkıbasım). Ankara 1995.
- BN: ザヒールッ・ディーン・ムハンマド・バーブル『バーブル・ナーマ』間野英二校訂. 京都 1995.
- BW: 'Alî-Şîr Nevâyî, *Bedâ'î'u-l vasa'if. Üçünçi Divân*. hazırlayan: K. Türkay. Ankara 2002.
- ED: Sir G. Clauson, *An Etymological Dictionary of Pre-Thirteenth-Century Turkish*. London 1972.
- FŞ: Алишер Навоий, *Хамса. Фарҳод ва Ширин*. Танкидий текст. тайёрловчи: П. Шамсиев. Тошкент 1963; 'Alî-Şîr Nevâyî, *Ferhâd ü Şirin*. İnceleme - Metin. hazırlayan: G. Alpay-Tekin. Ankara 1994.
- GD: J. Eckmann, *The Divân of Gadâ'î*. Bloomington 1971.
- ĞŞ: 'Alî Şîr Nevâyî, *Ġarâ'ibü'ş-şîğar*. İnceleme - Karşılaştırmalı Metin. hazırlayan: G. Kut. Ankara 2003.
- HA: Алишер Навоий, *Хамса. Хаёрат-ул-аброғ*. Илмий танкидий матн. тузувчи: П. Шамсиев. Тошкент 1970.
- LD: *Lutfi Divanı*. Giriş - metin - dizin - tıpkıbasım. ed. by G. Karaağaç. Ankara 1997.
- LТ: Алишер Навоий, *Лисонут-майр*. Илмий-танкидий текст. тайёрловчи: Ш. Эшонхўжаев. Тошкент 1965; 'Alî Şîr Nevâyî, *Lisânü'ğ-ğayr*. hazırlayan: M. Canpolat. Ankara 1995.
- MA: Haydar Tilbe, *Mahzenü'l-esrâr* (Gramer - Metin - Dizin - Tıpkıbasım). ed. by A. Gözütok. Erzurum 2008.
- ML: 'Alî Şîr Nevâyî, *Muḥākemetü'l-luğateyn. İki Dilin Muḥakemesi*. hazırlayan: F. S. Barutçu

- Özönder. Ankara 1996.
- MM : Şeyh Şeref H'âce, *Mu'inü'l-mürîd* (Transkripsiyonlu metin – Dizin – Tıpkıbasım). hazırlayan : A. F. Karamanlıoğlu. İstanbul 2006.
- MN : T. Gandjei, "Il "Muḥabbatnāma" di Ḥōrazmī" *Annali dell'Istituto Universitario Orientale di Napoli*, N. S. 6 (1957) : 131 – 161 + Facsimile.
- MQ : 久保一之「ナヴァーイー（ミール・アリーシール）の社会観 —— *Maḥbūb al-qulūb* 第1章日本語訳（付. ローマ字転写校訂テキスト）——」『京都大學文學部研究紀要』47（2008）, 183 – 295.
- QB : R. R. Arat, *Kutadgu Bilig* I. Metin. Ankara 1947.
- QBH : *Kutadgu Bilig*, Tıpkıbasım I. Viyana Nüshası. İstanbul 1942.
- Quṭb : A. Zajaczkowski, *Najstarsza Wersja Turecka Ḥusrāv u Šīrīn Quṭba* I. Tekst. Warszawa 1958.
- Sang. : *Sanglax. A Persian Guide to the Turkish Language by Muhammad Mahdī Xān*. Facsimile text with an introduction and indices by Sir Gerard Clauson. London 1960.
- Sayf : Seyf-i Serāyi, *Gūlistan Tercümesi (Kitāb Gūlistan bi't-Türki)*, ed. by A. F. Karamanlıoğlu. Ankara 1989.
- Steingass : F. Steingass, *A Comprehensive Persian-English Dictionary*. Beirut 1975 (reprinted).
- SD : *Mevlāna Sekkākī Divanı*. hazırlayan : K. Eraslan. Ankara 1999.
- TA : 菅原睦『ウイグル文字本『聖者伝』の研究 I. 序論と転写テキスト』神戸 2008.
- Bodrogligeti, A. (1963) A collection of Turkish poems from the 14 th century. *ActOH* 16, 245 – 311.
- Bodrogligeti, A. (1971) *The Persian Vocabulary of the Codex Cumanicus* (Bibliotheca Orientalis Hungarica XVI). Budapest.
- Фазылов, Э. И. (1982) Будапештская рукопись «Гул-у Хаеруз» Лютфи. *ActOH* 36, 155 – 166.
- Levend, A. S. (1965) *Ali Şir Nevat I. Hayati, sanati ve kişiliği*. Ankara.
- Levend, A. S. (1967) *Ali Şir Nevat III. Hamse. Hayretü'l-Ebrar, Ferhad ü Şirin, Leyli vü Mecnun, Seb'a-i Seyyar, Sedd-i İskenderi*. Ankara.
- Pisowicz, A. (1985) *Origins of the New and Modern Persian Phonological Systems*. Kraków.
- Рустамов, Э. Р. (1963) *Узбекская Поэтика в Первой Половине XV. Века*. Москва.
- Стеблева, И. В. (1966) Арабо-персидская теория рифмы и тюркоязычная поэзия. in *Тюркологический Сборник. К шестидесятилетию Андрея Николаевича Кононова*. Москва. 264 – 254.
- Стеблева, И. В. (1971) *Развитие Тюркских Поэтических Форм в XI Веке*. Москва.
- Стеблева, И. В. (1993) *Ритм и Смысл в Классической Тюркоязычной Поэзии*. Москва.
- 菅原 睦 (1998) 「チャガタイ・トルコ語の成立と文学的伝統」『神戸市外国学大学外国学研究 アジア言語論叢 2』, 121 – 138.

菅原 睦 (2002) 「チャガタイ文学とイランの伝統」『総合文化研究』 5, 49-62.

菅原 睦 (2009) 「中央アジアにおけるテュルク語文学の発展とペルシア語」森本一夫 (編著) 『ペルシア語が結んだ世界 —— もうひとつのユーラシア史 ——』北海道大学出版会, 131-146.

Thiesen, F. (1982) *A Manual of Classical Persian Prosody: with chapters on Urdu, Karakhani-dic and Ottoman prosody*. Wiesbaden.

(東京外国語大学大学院総合国際学研究院)